谷崎潤一郎

新々訳

源氏物語

巻六

谷崎潤一郎

新々訳源氏物語　巻六

中央公論社

新々訳源氏物語巻六奥付
昭和四十年五月十日印刷　昭和四十年五月二十日発行
訳者谷崎潤一郎　発行者宮本信太郎　印刷者高橋武夫
発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地
定価四八〇円

巻六目次

若菜上……三
若菜下……一〇七

蔬菜上

若菜上

朱雀院の帝は、この間の行幸の後、その時分からずっとおん心地がすぐれず、お患いになっていらっしゃいます。もともと御病身でいらっしゃいます上に、今度はことにもの心細くお感じ遊ばすにつけても、かねてから出家の本意がありながら、母后の宮の御存生中は何かと御遠慮遊ばして、今日まで見合わせていらっしゃったのですが、やはりその方へお心が惹かれるのでしょうか、「この先長くも生きられない心地がする」などと仰せられて、その御用意などを遊ばします。御子たちは、春宮を除きまいらせて、女宮たちが四ところおいでになりました。その中で、かつて先帝の時の源氏で、まだこの院が春宮の頃にお上りなされたおん方で、藤壺と呼ばれていらっしゃいましたのが、ゆくゆくは后の位にも定まり給うべきでしたのに、格別のおん後見もおありにならず、母君の身分も、これという家柄でもなく、ほんのちょっとした更衣に過ぎませなんだところから、内裏

イ、弘徽殿大后の崩御のこと始めて見える

ロ、先帝の皇女として生れ、先帝の時に、源氏姓を与えられた人という意。この先帝は桐壺院の前の代に当る

ハ、桐壺院の藤壺の異母妹に当る

でのお附合いも肩身が狭く、まして大后が、尚侍を入内おさせなされて傍らに人なきがごとく後押しをされたりしましたのに、気圧されていらっしゃいましたのを、帝もお心のうちではいとおしゅう思し召しながら、やがて御位をお降りになりましたので、とうとう芽をお出しにならず、気の毒な有様で、わが身の不運を恨むような風でお亡くなりになられました、そのおん腹の女三宮を、大勢おいで遊ばすうちでも、わけて可愛くお思いになって、大切にかしずいていらっしゃいます。お歳はその時分十三四ぐらいでおいでになります。院はいよいよ世を捨てて山籠りをするにつけても、後に取り残されて誰を力にお過しになるというのであろうと、ただこのおんことを御心配なされ、思い歎いておいでになります。西山の御寺の造営が終りまして、そちらへお移りになる御準備をなさいますかたわら、またこの宮のおん裳着のことをお思い立ちになって、そのお支度をなさいます。院のうちに御秘蔵なすっていらっしゃるおん宝物、おん調度どもはさらにもいわず、何でもないお手遊びのお道具までも、少し由緒のある限りの品々は、皆この宮のおん方へとお上げになりまして、他の御子たちにはその次々の品々を御分配になるのでした。

春宮は、院がそういう御病気の上に、遁世の思召しがおありになるとお聞きになりまして、お伺いになります。母女御もお附き添い申して、参上なさいます。すぐれた御寵愛を受けたのではありませんけれども、かように春宮がお生れなされた、限りなくめでたいおん宿世のおん方でいらっし

イ、朧月夜の尚侍

ロ、承香殿女御。髭黒大将の妹

八、老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君哉〔伊勢物語〕

やいますので、院も年頃のおん物語をこまごまとお取り交しになるのでした。宮にもいろいろのおん教え、世をお治めになるお心づかいなどをおっしゃってお上げになります。お歳のほどよりはえらく大人びていらっしゃいまして、おん後見の女御方のお里もそれぞれ身分のある方々でいらっしゃいますので、たいそうお気強うお感じになっておられます。「もはやこの世に執着もありません。女宮たちが大勢後に残りますので、その行くすえを案じますのが、『さらぬ別れ』にも絆になりそうに思われます。年頃人の身の上で見聞きしたところを考えましても、女はとかく自分の心のままにならないことをしでかして、人の誹りを受けるように生れついていますのが、まことに口惜しく悲しいことです。やがて思し召すままの御代になったら、何かにつけて、あの人たちにいずれもいずれもお眼をかけて上げて下さい。その中で後見などのある人は、その方へ任せておいても構いません。しかし三宮は年端も行きませんし、私ひとりを頼みにしていましたのに、その私が出家をしましたら、後でどのように途方にくれることやらと、それがたまらなく心がかりで、悲しく思います」と、おん眼を押し拭いつつお話しなさいます。女御にも、温かい心を持って尽くしてお上げになるようにお頼みになります。が、その女宮のおん母君の、藤壺と言われたおん方が、誰よりもおん覚えがめでたくて時めいていらっしゃった頃には、皆それと競争をなすって、睨み合っていらしったおん間柄のことですから、そのお気持がまだ残っていて、今は格別憎いというほどのことはな

くとも、ほんとうに心を籠めてお世話しようとまでは、どなたも思っていらっしゃらないのではないでしょうか。

朝夕にこのおんことを思い歎いていらっしゃいます。年が暮れて行くにつれて御病気はまことに重くおなりなされて、御簾の外にもお出になりません。ときどきおん物怪に悩まされ給うことはありましたけれども、こういう風に引きつづいて、ちょっとも止む時がなくお苦しみになることはおありにならなかったのに、やはり今度は最後であるとお思いになるのでした。今は御位をお降りになっていらっしゃいますが、御在位の頃から御恩にあずかっておられた人々は、昔に変らず御機嫌うるわしゅう、お情深ういらっしゃるおん有様を、心の慰め所として、いつもお伺いしては御用を勤めておられましたので、その方々は皆胸を痛めて、御無事を祈っておいでになります。六条院からもお見舞いがたびたびあります。御自身でもお伺いなさるとおっしゃいますので、その由を聞し召して大そうお喜びになります。中納言の君が参上なさいましたのを御簾の内にお召しになりまして、こまやかなおん物語があります。「故院がお崩れなさいます時にさまざまな御遺言があった中で、この院のおんことと今のお上のおんことを、取り分けてお言いのこしになりましたけれども、位にいる時は公の掟があるので、心のうちの親しみは変らないながら、つまらない行き違いから、お恨みを受けるようなこともあったと思いますが、長い年月の間に、その時分のことを後まで恨ん

イ、夕霧
ロ、桐壺院
ハ、六条院、すなわち光源氏

でおられるような様子を、どういう折にもお漏らしになったことはありません。賢い人でも自分の身の上のことになると、道理を間違えて取り乱したりして、必ず意趣を含み、曲った行いをするようになることが、昔でさえも多かったのでした。ですから、いつかはそんなお心がちらりと覗けることもあろうと、世間の人もそう思って疑っていましたのに、とうとう我慢し通してしまわれて、春宮などにも好意を寄せて下さいます。その上姫を入内させて、今は一層深い間柄になり、親しくなすって下さいますのを、心の内では限りもなく嬉しく思いながら、何分本性の愚かなのに加えて、子ゆえの闇に迷ったりして、見苦しい振舞いをするのもいかがと、わざと餘所事のように、人任せにしています。もっともお上のおんことは、御遺言を違えず世をお譲り申し上げたところ、かように末の世の明君として天が下を治め給い、前の代の不面目を取り返して下さいましたのは、全く私の願い通りになったわけで、この上の喜びはありません。それにつけても、この間の秋の行幸から、昔のことも合わせ偲ばれてなつかしく、お目にかかるのが待遠しく思われるのです。じきじきに対面して申し上げたいことなどもあります。是非御自身で訪ねて来て下さるようにお勧め申して下さい」などと、涙ぐみつつおっしゃいます。中納言の君、「遠い昔のいきさつは、何とも私には分りかねることでございます。成人いたしまして、公にも仕えるようになりましてから、世の中のことにかれこれと係り合いますにつけまして、大小となく父に相談いたしますけれども、そういう場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

合にも、また内輪の話の折などにも、若い時分に辛いことがあったなどと、ついぞ仄めかされたことはございません。『こうして朝廷のおん後見を中途で御辞退申し上げ、遁世の望みを叶えるためにすっかり引き籠ってしまってからは、何事をも与り知らぬようにしているので、故院の御遺言のようにもお仕えせずにいるのです。今の院が御在位のうちは、自分も年が若かったし、人間も出来ていなかったし、偉い人たちが上に大勢控えてもおられたので、自分の志を遂げて御覧に入れる機会もなかったのでした。今はこうして御位をお降りになって、のどかにお暮し遊ばしていらっしゃるので、お伺いして心のうちを隔てなく申し上げもし、承らしてもいただきたいと思うのですが、やはり何となく窮屈な身分になったので、ついそのままに月日を過しているようなわけで』と、折折歎いておいでになります」などとお奏しになります。

まだ二十にも少し足りないほどですけれども、たいそう貫禄も整って、顔だちにも今が盛りの色つやが溢れて、ひどく美しいのを、おん眼にとめて打ち守らせ給いながら、処置に悩んでいらっしゃるこの姫君を、こういう者になどと、人知れずお思い寄りになるのでした。「何か近頃は、太政大臣のあたりに縁があって、身を固めたという話だね。年頃故障がはいっているように聞いていたので、気の毒なことに思っていたのが、それで安心したとはいうものの、多少残念に思う仔細もある」と仰せられますので、何と思し召しておっしゃることやらと、訝しく感じながら、なるほど、

そういえば、あの姫宮のお扱いにお困りなされて、しかるべき相手があったら、それに嫁がせて心安く出家をしたいものと、お考えになっていらっしゃるのを自然漏れ聞いてもいましたので、ひょっとしたらそんなおつもりではないのかと、考えつきはしますものの、でもそんなことを、何として心得顔に御返事申し上げましょう。ただ、「何の働きもございません身には、なかなか恰好な縁も見つかりかねまして」とばかり申し上げて、差し控えてしまいます。女房などは御簾の蔭から身を乗り出してお姿を見て、「御器量と言い、おん心用いと言い、あれだけの方がめったにおありになりましょうか。何という御立派な」などと、寄り集って言うのですが、中で年を取ったのは、「いやいや、そういっても、あの六条院がこれほどの若さでおいでになった時のおん有様と、比べものになりましょうか。ほんにあのお方は眼も眩むようにお綺麗でいらっしゃったものを」などと言い合いますのを、院もお聞き遊ばして、「全くあの人は異様に美しい人だったね。近頃はまたあの時分よりも老熟して、光るとはあのようなのを言うのかと思えるほど、いよいよ輝きが増して来た。真面目に公の用事などをする時は、凛とした威厳があって、見るも眩い心地がするし、また打ち解けて冗談を言ったりふざけたりする遊びの場合には、その方面でも並々ならず愛嬌があって、誰よりも親しみやすく、惹きつけられる気がするのは無類で、こんなのは世間に例がない。何事にも前の世の善根が思いやられて、珍しい様子をした人だ。幼い時分内裏で育てられていた頃は、ど

んなに限りなく帝王の慈愛をお受けになったことか。お上があんなにも撫でさするように大切に遊ばして、御自分の身にかえてもと思し召していらっしゃったが、わがままな心驕りをせず、遜って、二十になるまでは納言にもならないでしまった。たしか二十一の歳に、宰相で大将を兼ねられたのではなかったであろうか。それから思うとこの中納言がえらい出世をしているのは、だんだんと一門の声望が盛んになったせいであろう。政治の方の学問とか心構えとかいう点からは、これもおさおさ父に劣りそうでもなく、どうかすると親以上に老成した感じがあるのは奇特なことだね」などとお褒めになります。

姫宮がたいそう美しくて、あどけなく無邪気なおん有様なのを見給うにつけても、「この宮をせいぜい可愛がって上げて、未熟なところを大目に見て教えて差し上げるような人で、信用できる人があったら預けたいものだが」などと仰せになります。重だったおん乳母どもをお召し出しになって、おん裳着の時のことなどを仰せられるついでに、「六条の大臣が式部卿宮の姫を生し立てたように、この宮を引き取って育ててくれる人はないものであろうか。尋常人の中にはありそうもないし、内裏には中宮が伺候しておいでになる。つぎつぎの女御たちとても、やんごとない人々ばかりが揃っておられるのであるから、しっかりした後見がなくては、そういう中に交って宮仕えをするのも、並大抵ではないであろう。この権中納言の朝臣が独り身でいた間に、仄めかしてみればよか

イ、紫の上

ったのだ。若いけれども非常にすぐれたところがあって、行く末たのもしそうな人らしいのに」と仰せになります。「でも中納言はもともといたって実直な人で、年ごろ今のおん方に思いを寄せていまして、餘所のあたりを見向きもしなかったのでございますから、その望みが叶った今となっては、なおさら心を動かすはずはございますまい。それよりはあの父の院こそ、なかなか今でも、いろいろな折につけて人を慕わしくお思いになる心が、絶えずおありになるようでございます。わけてもやんごとない御身分のお方をお求めになるお志が深くて、前斎院のおんことなどをもいまだに忘れることができず、おん文をお上げになりますそうで」と申し上げます。「いや、その相変らずの浮気心が、どうも心配なのだ」とは仰せになりますものの、ほんに、数多の人たちの中にはいって、辛い思いをすることはあっても、やはりこのまま親代りということにして、そっくりあそこへ引き取って貰ったら、などともお思いになるでありましょう。「ほんとうに、まあ少しでも世間並みな夫婦らしい暮しをさせたいというような娘を持ったら、同じことならあの人の側に置いてやりたく思うであろうね。どうせ長くはない浮世に生きている間は、ああいう風に心ゆく限りの楽しみをしてこそ過したい。私が女だったら、同じ兄弟であっても、必ず寄り添って契ったであろう。若い時分などには、よくそう思ったものだ。まして女が迷わされるのはもっともなわけだ」とおっしゃるのでしたが、お胸の中では、昔の尚侍の君のおんことなどを思い出しておいでになるのでしょう。

ロ、朧月夜のこと。「賢木」一五三、一五六頁、および一八五頁以下参照

この姫君のおん後見たちの中で、或る地位の高いおん乳母の兄に左中弁がいましたが、その人は六条院にも出入りしていまして、年ごろ親しく仕えているのでした。こちらの御殿にも深く心を寄せていまして、よくお伺いしますので、或る日乳母はその兄が参上したのに会いまして、物語をしますついでに、「お上がこれこれの思召しがあって、それらしいことをおっしゃっていらっしゃいますが、折があったらあの院にお漏らしになって下さい。女御子というものは、独り身でおいでなさいますのが普通ですけれども、何かにつけて面倒を見てお上げ申し、いろいろの場合にお世話をして上げる人があったら心丈夫だと思います。このおん方には、お上をお措きまいらせて、親身になってお上げ申す人がないので、私どもがお仕え申しているといっても、何ばかりのお役にも立ちません。お側にいるのは私だけではないのですから、自然思いも寄らないことを引き起したりして、およろしくない評判などが立ちましたら、どんなに厄介なことでしょう。お上の御在生中に、何とかこのおん方のおん身が定まりましたら、御奉公しやすかろうと思います。貴いおん血筋でいらっしゃっても、女はいとも宿世の定めがたいものなのですから、考えるといろいろ心配になりますし、かように大勢の御子たちがおいで遊ばす中でも、取り分けいとしがられていらっしゃいますので、人の嫉みがあるかも知れませんし、何とかして些細な瑾をもおつけ申さないようにしたいのですが」と、相談を持ちかけますと、「どういう次第がおありになるのか、不思議にあの院はお気

の長いお方で、かりにもお見初めになった人は、お心の留まったのも、またそれほど深くなかったのも、ほどほどにつけてお迎え取りになって、御殿のうちに数多お住ませになっていらっしゃるが、大切になすっておいでなのは、やはりちゃんときまっていて、お一方だけなのだから、そのお方の勢いの強い蔭には、あるに甲斐ない月日を送っていらっしゃる方々が、大勢あるというわけです。ところで、御縁があって、もしそういう風なことにでもなるとしたら、その大切なお一方とても、こちらと肩を並べて対立なさることはできないであろう、と、一応は想像されるけれども、なおその点はどうであろうかと、案ぜられるふしもあるような気がする。そうかといって、『この年になって、身に餘る栄耀栄華をして、何一つ心残りなことはないのだけれども、ただ女のことについては、今までに人の非難も受けたし、自分の心にもまだ不満足なことがある』と、いつも内輪の御冗談話におっしゃっておいでになるが、全く私どもから見てもそうでいらっしゃると思われる。いろいろな関係でお世話をしていらっしゃる方々は、どなたも不似合いな、身分の低い人たちではいらっしゃらないけれども、皆たかの知れた尋常人のことなので、院のおん有様に比べられるような声望を持ったお方は、いらっしゃらないように思える。それを思うと、同じことならそういう御縁がお出来になったら、どんなに似つかわしい御夫婦におなりなさろう」と、弁はそんな風に言いますので、乳母はまた何かの折に、「これこれのことを某の朝臣に仄めかしましたところ、『必ずかの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com